
笑顔にまつわるマジックショップ

甘森礎苗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔にまつわるマジックショップ

【Zコード】

Z2202BA

【作者名】

甘森健苗

【あらすじ】

日本のとある町に、不思議な噂の店があった。なんでもその店に入ると、どんな悩みでも綺麗すっかり解決してしまってのだと。誰もが一度は訪れたい店だが、出入りできるのは特定の人だけだとか……。

へんてこな魔法使いと、それに振り回される人達の日常のお話です。

e ポー・1 暫に此處での少しの希望を（前書き）

本作を読もうとしていたり、ありがとうございます。
稚拙な表現かと思いますが、どうぞよろしくお願いします。
あなたにとって一時の娯楽になりますよう。

甘森健苗

帰宅ラッシュの電車から大勢の人間がホームに降りた。

過密状態の閉鎖空間に長時間投獄され、体力はすでに奪われている。夏が本格的に始まろうとしているこの時期の車内は地獄の業火のことく室温を跳ね上げ、乗客を自然と蒸し殺す処刑空間へと豹変する。

自分と同じようなサラリーマンの人混みに紛れながら、船山悟はやつと地獄の帰宅電車から脱出した。

いつもなら帰りは気分が軽いものだ。自宅まで戻るのが面倒だが、到着すれば自分の空間が待っている。

今日はお気に入りの釣り竿の手入れをしようか。
それが終わったら今夜も彼女に電話をかけようか。

帰つたらすることを考えるだけで、いつもの船山は楽しい気分になっている。

ところが今日はそうはいかない。予定があるわけではない。極度に気が向かない理由があつた。

今日、恋人に振られた。

恋愛経験が少ない船山にとって、失恋のショックは大きかった。
それだけならば話は单纯だつたろう。心の傷は時間が癒し、また新しい恋に巡り逢つただろう。

だが事はそう単純にいかなそつだつた。未練があるわけではない。もつと別の問題だ。

元カノに熱愛していた船山は、恋人が可愛いあまりにいろいろな物を買つてあげていた。彼女が欲しがる物は必ず覚えておき、手に入れられるように様々な工夫をした。俗に言つ『ミシグ君』状態だ。

無理のある買い物を続けていくと貯金など塵のように飛んでいく。求められた品物が高額なら尚のこと。船山も同様だった。

貯金が底を突いても彼女の物ねだりは止まらず、船山はプレゼントを愛情と決め込み、無理をし続けた。

その結果、船山は借金をすることになった。貯金が足りないと自覚していた船山は、キャッシングカードを使用して仮初めの資金を作っていた。

船山の自宅はアパートのため土地を担保として借金することはできず、通常の銀行からの借金として積み重ねていった。

彼女に好かれたい。彼女にもっと振り向いてほしい。その思いで、船山は危険な手段を取り続けた。

しかし、その努力は実ることはなかった。

今日の昼休みの前、彼女から突然メールが送られてきた。

内容は「別れてほしい」という素つ気ないものだった。

電話は繋がらず、狂つたようにメールを送つたら、すでに本命の恋人がいるという内容が返ってきた。

真偽は不明だが、船山は間男として貢がされていたということになる。

彼女への思いは粉々に砕け、目の前が真つ暗になったような気がした。

手元に残つたのは、無機質に印刷された銀行明細書と借用証明書。

累積借用金額は優に一千万円を超えている。貯金がある頃ならば工面次第で何とかなりそうな金額だつたが、今の船山は無一文に等しい。

船山の月給は手取りで一二十数万円ほど。給料全てを返済に充てても五十年かかる。定年までに返済できる額ではない。

低金利の銀行や大手クレジットカード会社からすでに多額の債務があるため、これ以上借りるのは望みが薄い。

貯金がない現在、五十年もの時間を、金銭を消費せずに生活する術など持つていらない。

どうすればいいのだろう……。

またブラックでも借りることができる金融機関を探さなければならぬのか……。

いや、仮に見つけられたとして、残りの人生を借金返済のために費やすことになるのか……。

「の先、俺は何を希望にして生きていけばいいのだろう……。

希望の見えない先が予想されて、船山の目に涙が滲んだ。

考えても考えても良案は浮かばず、背筋が曲がる。考えないよう頭を振り、遠くの景色を眺めると、彼女の顔が思い出され、すぐに現実の問題を想起させられる。

鬱々とした気分で、船山は駅の出入口をくぐった。

なんとなく周囲を眺める。

自分と同じような安物のスーツを着て家路を急ぐ男性達が自分を追い越していく。

自転車の籠に買い物を乗せ、後部座席には幼稚園児を乗せながら道路を走る女性の姿が通り過ぎる。

部活帰りなのか、スポーツバッグを肩にかけた高校生が対向からすれ違う。

自分と同じ人間なのに、平凡な生活をしているはずなのに、彼らが無性に羨ましく見えた。

一生懸命頑張れば成果が期待されている。不満はあっても、家族や仲間と話す余裕がある。

自分にはないものを、周囲の人間は全員持っていた。

どうしようもない現実を抱えている自分。
どうしようもない未来が待っている自分。

船山の田は知らないうちに涙ぐんでいた。

周りの人間が不思議そうに一瞥し、気味の悪そうに自分から距離を取る。

助けてくれたっていいじゃないか。

「どうしたんですか?」ってだけでも話しかけてくれたっていいじゃないか。

極めて惨めに思えた船山は、その場から逃げるよつに歩き出した。
後ろへ去つていく周りの店。

アスファルトに直接書かれた道路の標識。

客寄せをしている若いスタッフの声。

ちらちらと眼や耳を刺激するそれらを嫌に思いながら、少しでも早く自宅に帰ろうと足を進めていた。

その途中、ふと店の明かりが視界の端に映つて、船山は立ち止まつた。

煉瓦調の外装で覆われ、一点の曇りもなく磨かれたガラス製の出入り口のドアを持つ店だった。店内の様子を窺うと、ちらちらと人が動いているのが見えた。

一階建ての「ぱんまり」とした建物を見て、船山は不意に疑問に思つた。

こんな店など、今まであつただろうか？
会社に勤めて八年目。この通勤道路を使って馴染んでいたつもり
だが、このような店があつたかどうか記憶になかった。

船山は見上げ、店の名前を探した。

何も書かれていない。ただ外装があるだけだ。

不思議な店だった。ただ店内の光が漏れていたのを見つけただけ
なのに、視線を話すことができない。

入つてみよう。気晴らしにはなるだろ？

動機などなく、気が向いたからとこつ理由で、船山は惹きつけられ
るように店の扉を押した。

チリンチリン、と扉に取り付けられていた鈴が鳴る。中にいた人
間がその音に反応し、船山のほうへ振り返る。

「いらっしゃいませ！」

出迎えたのはとても若い少女だった。見た目は十三、四歳ほどの
スタッフで、若いというよりも幼いと形容したほうがしつくりくる。
挨拶の声は子供の特徴的な高い声で元気がいい。

女の子の格好は、何かを狙っているのか、メイド服だった。紺の
半袖パフスリーブワンピースは膝丈のスカートの上に白いフリルが
付いており、その上に清潔さのある白のエプロンを重ねている。頭
にはヘッドドレスを載せ、髪の一部を飾りの付いた髪留めで小さく

括っている。足下は黒のオーバーニーソックスに結い上げの革靴を履いており、格好が本格的だ。

秋葉原を始めた東京近郊の町にこういった服装を着たスタッフのいる喫茶店が多く営業しているとは聞いたことがあるが、実際に目の当たりにしたのは初めてだった。地元の駅前でこういう店があるなんて聞いたことがない。

若い店員はダスターを手に持っていた。店内のテーブルを拭いていたらしい。

「すみません、ちょっと掃除をしていまして。いらっしゃい」

そう言って案内されたのは、店内の向かって左側にあるカウンタ一席だった。今はカウンターの向こうに店員はおらず、他の客もない。

船山は促されるままに席に着いた。

「ただいまカウンター担当の者を呼んで参りますね。よろしければこちらをお使いください」

女の子が差し出してきたのはおしごりだった。仕事終わりで満員電車に乗ってきて汗まみれとなっている身にとつてはありがたい代物だった。

船山がそれを受け取ると、メイドスタッフはカウンターの奥に消えていった。

一人だけで残された船山は、メニューを見る前に店内をぐるりと眺めた。

内装は木目調の素材を基調に、落ち着いた雰囲気を演出している。

フローリングは綺麗に磨かれ、自分のみつともない顔が映つて見えそうだ。派手な色は避けているが、店内は明るい照明で照らされ、薄暗さや陰湿な感じはしない。

客用のテーブルは五人まで座れるカウンター席の他に、四人席のテーブルが三つ設置されている。先ほどのメイドスタッフが丹念に拭いているためか清潔に保たれている。

カウンターを挟んだ向こうの棚には、様々な種類の瓶が並べられている。ジュースのものやアルコール類、コーヒー豆に茶葉と、飲み物関係の中身が大多数を占める。その他にも砂糖や七味唐辛子のような調味料も置かれている。

船山が背を向けているほうの壁には、いくつものアクセサリーが飾られていた。種類は様々で、女性物ばかりかと思ったが男性向けのデザインのものも見かける。

「どうやらこの店は、カフェ兼アクセサリーショップらしい。

「ちょっと店長のお客さんが来たんですからさつわと表に出てくださいー！」

「待つてよすすきちゃん！もうちょっとベストコア出せやうだから、てきとーに時間稼いで！」

「そんなもの、あとででもできるじゃないですか！いいからやつたと来てくださいー！」

「ここにまで来るの大変だったのよー？もう指なんか皮が剥がれそうなのよー？」

「本編の攻略に関係ない『ばくれつカブト虫』なんかにそこまでの

めり込まないでください。一千万点も行けばもう充分でしょー。」

「やだー。」今まで行つたからこなはカンストをせてみせぬシー。」

「店の営業とゲームとビッチが大事なんですかあーー。」

メイドの少女が消えていった奥から、女性同士の喧々囂々とした会話が聞こえてきた。

何をしているのかは見えないが、会話の内容から、ビッチやらカウンター担当である店長の女性がテレビゲームか何かに熱中しているようだ、それを女の子がやめさせようとしているらしい。

「騒がしくてすみません。もうすぐ来ますので」

カウンターの奥から青年が現れた。二十歳ぐらいの、まだ未熟さの拭えない雰囲気がある。綺麗にアイロンが消されたワイシャツとラインの折られたスラックス、ベストとネクタイを着用している。バーテンダーのような男性だった。

「お待ちいただく代わりに、お飲み物を用意させていただきますが、何に致しましょうか?」

急に注文を受け付けることになり、船山は穏やかに微笑んだ。

申し訳ないと思いながら白状すると、男性は穏やかに微笑んだ。

「えつと、すみません、メニューをまだ見ていないので……」

「心配なく。当店にはメニューはございません。お好きなものを

仰っていただければ何でも承りますよ

「な、何でも……？」

「ええ、何でも、です」

男性は笑顔で断言した。

さらりと一言で言つているが、男性の言葉の含意は無茶苦茶である。

『飲み物』で分類できる種類は数え切れないほど存在する。清涼飲料水や炭酸水などの飲料水、果汁を基礎にした果実飲料、牛やヤギから採れる動物性蛋白質の乳製品やヨーグルトなどの植物性乳製品、麦茶や紅茶などの紅茶飲料、アメリカンやブレンンドなどに分かれる「コーヒー飲料、ビールや日本酒などのアルコール飲料……」。

一般に商品として出回っている種類ならともかく、地方限定で作られているものや商品として作られていない文化独特の種類も少なからず存在する他、日本にとどまらず世界中で作られている飲み物を含めると千差万別だ。そこに、一種類以上の飲み物を組み合わせるカクテルまでも範囲に入れると、その数は無限といわざるを得ない。

大雑把に列挙しても一つの店が提供できる量ではなく、材料の保存に莫大な維持費がかかる。

また、バーテンダーやソムリエの有資格者であつても一人の人間が覚えきれる数でもないことは確かだ。

「……」

男性の言つことが本当なのか、船山は出来心で試したくなつた。

「じゃあ、エスプレッソを、お願いします」

「風味はアメリカンやブレンドなどいろいろありますが、いかが致しましょつか?」

「……ナポリ風についてできますか?」

「かしこまりました。只今、用意いたします」

明朗な返事とともに、男性は準備に取りかかつた。

カウンターからは作業の様子が丸見えになつていて、どのような行程で淹れているのか見物したくなつた。万が一紛い物を用意しうものならクレームを付けるつもりでいた。

男性はまず、カウンターに据え付けられているエスプレッソマシンのタンクを開け、水を補給した。

次にコーヒーを濾過させるためのバスケットを用意し、そこに挽き立てのコーヒー豆の粉を適量詰める。男性はへラを手に取り、バスケットに詰めた粉を絶妙な力加減で押し固める。コーヒー豆からの抽出の場合、この力加減一つで味が変わると聞いたことがある。

それが終わるとバスケットをマシンのホルダーに取り付け、スイッチを押した。

男性はデミタスカップを用意し、抽出口にセツトする。蒸氣とともにマシンの注ぎ口から少量のエスプレッソがカップに注がれていく。知る人は知つてている最初の抽出されたエキス、いわゆる『一番だし』のコーヒーだ。凝縮した風味と新鮮な香りが飲んだ人を虜にする、通の者垂涎のエスプレッソである。

注ぎ終えたエスプレッソに男性は山盛りの砂糖を一杯入れ、素早く混ぜ合わせた。こうすることで濃厚なカフェと砂糖が攪拌され、クリーミーな甘いカフェエキスが出来上がる。“ナポリ風”というのはこの部分が特徴なのである。

日本での一般的な淹れ方は、コーヒーを注いでから砂糖などを入れて好みの味に調節する。しかし、ナポリ風では濃厚なエスプレッソを考慮して初めから砂糖を混ぜ、まろやかな風味に仕上げる。この点を知っているということは、何でも用意できるという男性の言うことはあながち嘘ではないのだと思えた。

下ごしらえが終わつたところで、男性は改めてマシンからエスプレッソを注いでいく。

ゆっくりとマドラーで混ぜ合わされるその作品に、船山はいつの間にか釘付けになつっていた。

「お待たせいたしました。どうぞ、ナポリ風仕立てのエスプレッソでござります」

数分で用意された一杯のコーヒー。濃厚な黒い液体に芳しい香りを立てるのは、まさしく自分が望んでいたエスプレッソだった。カップの柄を持ち、淹れたてのそれに口を付ける。

「…」

口の中で広がるコーヒー豆の凝縮された味と香りが、船山に何ともいえない快楽をもたらした。全て計算し芳醇な香りを最高に引き出したこのコーヒーは、エスプレッソの特徴を見事に表現している。

一昔前、海外への出張でイタリアのナポリへ飛んだ時、友人に勧

められて仕事の帰りにカフェへ寄ったことがあった。日本にいた時も日常的にインスタントのコーヒーを飲んでいた船山は、イタリアに来ただけでわざわざ飲まなくてもいいと思っていたが、友人の強い推薦で一度経験することにした。

そこで飲んだのが、エスプレッソだった。

はじめは気が進まなかつたが、そのコーヒーは慣れない海外での仕事で緊張し疲弊していた船山の心を癒した。また、店員の振る舞いや店内の雰囲気が意外にも落ち着いていて、居心地の良さを感じた。

あとで知ったことだが、イタリアではちょっとした空き時間があれば店に立ち寄つてコーヒーを飲む風習がある。店内の和やかな雰囲気は文化から出来上がつた自然の空気だつたのだ。

船山はイタリアにいる間、仕事終わりには連日のように町に出向いてはカフェに寄つて本場のコーヒーを堪能するよつになつた。

何年も昔の話だが、あの頃は楽しかつた。仕事は多忙ながらも順調で、知らないことを覚えていくことが楽しかつた。未来に不安はあつても、熱意と誠意があれば何だつて乗り越えられるよつな気がした。

それが、今では……。

「お待たせしましたー！ちょっと用事で忙しくつてーー！」

間延びする声がカウンター奥から聞こえた。どうやら店のマスターが来たらしい。

現れたのは二十代前半と見える若い女性だつた。肌は透き通るような白さだが、仕種や態度から不健康そうな印象はない。顔立ちは可愛さの溢れる整い方をしており、日本人離れしている外見からし

て少なくともハーフだと思える。

つぶらな瞳と背中まで伸びた髪は、思わず目が向いてしまうような赤い色をしていた。現実的ではないものを田の当たりにしているが、不思議と警戒心は起きず、珍しいものを見るような気持ちで引き付けられた。

服装はノースリーブブラウスにブラックとロイヤルパープルのツインターカーを締め、漆黒のロングスカートを履いている。

快活さと気楽さを兼ね合わせたような格好をしているが、言動は明らかに後者に傾いているように思える。

「……って、あらっ、むひ！」注文はお済みのようですね？」

船山の前に用意されたエスプレッソを見て、女性はすでに最初の注文が終えていることを知ったようだ。それに対して、男性が穏やかに答える。

「少々時間がかかると思いましたので、僭越ながら先に承つておきましたよ」

「さつすがーどこのお嬢婆娘より気が利くわね！」

「気が利かないお嬢婆でいつもすみませんでしたね！」

女性の後ろから、先ほどのメイド姿の少女が顔を出した。その表情には少し疲弊の色が浮かんでいる。どんな説得があつたのかは窺えなかつたが、店長である女性の腰を上げるのに大変苦労したらしい。

「信矢、飲み物はいいけど、お菓子は？」

「いえ、まだお出ししていませんが……」

男性の反応に、女性は皿を釣り上げた。

「ダメじゃないの一早く用意して！私も食べるからー。」

「自分が食べたいだけなんですね……」

男性は苦笑しながら裏に消えようとしました。

「まあ、マドレーヌで呑かねば用意しことたよ」

裏から別の従業員が片手に皿を持ちながら出てきた。

見た目の年齢は、四人の中で断トツで低かった。高く見ても十歳前後、あどけなさしかない外見の女の子だった。

そして何よりも皿を引くのが、白い長髪だった。腰まで長く伸びた髪は生え際から白一色で、銀髪に染めているところよりも白髪になっているように見える。

女の子は簡素なTシャツに、猿なのか豚なのかよく分からぬアッシュプリケが付いたエプロンとこう、家庭でお菓子作りでもしているかのような恰好だった。現に、その手には作り立てのお菓子が載つた皿がある。

「ありがと、荊歩」

お礼を言しながら女性は皿を受け取る。その皿を、船山の皿の前に置いた。

「どうぞ、茶請けのつもりで召し上がってくださいね

船山は出されたマドレーヌを口に含みながら眺めた。

「あの、注文していないのですが……」

「心配ありません。こちらは当店からのサービスです。もちろんお勘定には含みませんよ」

男性が爽やかな笑顔で言った。

代金が不要と知つただけで妙な焦りが霧散した。同時に、せこいところに神経質になつていて自分を卑しく思えた。いくらお金の問題を抱えているとはいっても、過敏になつている。

食べてもいいと許可が出たが、日本人の性が、田の前の食べ物に飛びつくのは憚られた。

「何を躊躇つているのか知りませんが、遠慮なんかいらないですよ。他でもないあたしが作つたんだ、味も保証します」

少女は布巾で手を拭きながら表に出てきた。

見た目は幼いのに、大人に囲まれながらも怖じ氣づかない姿勢が不思議だった。言葉遣いは端々に未熟さが見られるものの、子供らしい無知による無邪気な無礼ではなく、きちんと社会を知つた上の弁えた振る舞いがあった。

「どうか本音を話しますと、お客様が食べてくれないというの従業員も食べられないんですよ。いさむそれが店のルールでして

少女は「あはは」と苦笑しながら頬を搔く。

最初の一回目はお客様から。

そういう規則があるのだらう。

周りを見ると、他の店員も同じような反応をしている。

船山は集つた店員たちを見比べた。

せいぜい中学生にしか見えないメイド姿の少女。

頼りない雰囲気がありながらも客の注文を何でも用意する成人くらいいの男性。

この中でおそらく年長者なのだろうが年下の従業員に怒られている、店長らしき女性。

お菓子を片手に、大の大人を前にして堂々と接する女の子。

不思議な光景だと思った。

外見で判断するべきではないことは重々承知している。先程の「コーヒーの件から、店員のスキルは十二分に達していると判断できる。しかし、目の前に広がっている店員の平均年齢が低すぎる」と思ってならない。

一つ間違えば、子供のまま」とのスペックを著しく進化させたよつなものに見えた。

不思議な点は多々あるが、出された物に手を付けないのは失礼な気がして、船山はマドレーヌを一つ手に取り、嚙つた。

大きさを考えて作られてあるせいか、食べやすかった。固すぎず、柔らかすぎず、適度な歯ごたえを持たせてある。間食として食べるお菓子に最適だと思つた。

味も控えめにしてあり、生地も少し瑞々しさがあつて食べるのが苦にならない。味の濃い「コーヒー」とちょっとビートル。

「……美味しいですね、これ」

素直な感想が船山の口から口ばれた。

「よく分かつたな。今日のそれは最近の中でも出来がいいぞ」

エプロン姿の女の子が、ふふんと鼻を鳴らして胸を張っている。

「こんなに美味しいものがまだ食べられるなんて、世の中わからないものですね」

多額の借金を背負つてから、船山の人生は一気に狂つた。身を削る思いで、爪に火を灯す日々を送り始めていた。

自分の人生は終わつた。そう思つていた時に、このような美味しいものを口にできるなんて思わなかつた。

船山は今までじでかしてきた自分の愚行と、この先暗闇でしかな

いこれから自分の未来を考えて、あまりにも惨めに思えてきた。

食べかけのマドレーヌを持つ自分の手に涙が落ちて、よつやく船山は泣いていたことを自覚した。

「す、すみませんーせつかく美味しいものをいただいているのに…」

慌てて田元を乱暴に拭つ。しかし、誤魔化さうとしても気持ちはさらには悲鳴を上げ始め、溢れた涙は止まらない。

どうしてこんなことに。
どうして自分がこんなことに。
どうして。いつ間違えた。どこで道を外れた。
こんな、こんな日が来るなんて、これからどんな気持ちで生きていけば。

「う

堪えようとしても、悲しみが心の底から溢れてくる。悲しいのは、多額の借金ができただことなどではない。

好きな女性に裏切られたことが、船山にとって一番悲しいことだった。

プレゼントを送つていたことが愛情表現だと言いたくはない。しかし、恋愛経験の少ない船山にとってはそれが最も表現しやすい愛情だった。

本当は理解してほしかつた。

幼稚な手段だが、君を愛しているところを少しでも感じてほしかった。

それが叶わないと知り、一人残された船山は、彼女への恋心が全て悲哀の感情へと変化してしまった。

ひとりしきり泣き散らし、テーブルには落ちた自分の涙が跡を作った。

そこに、そつとハンカチが差し出される。

「悲しい」とがあつたんですね」

店長と呼ばれていた女性が、船山を思いやつた言葉をかけてくれていた。最初とは打つて変わつて慈悲深い雰囲気を醸し出し、何も

かも受け止めてくれるよつた抱擁感を感じさせた。

「もし良かつたら、お話を聞かせていただけませんか？貴方が今持つていいる、一番悲しいお話」

お話というのは、おそらく自分の愚かな失恋話のことだらう。何のつもりかは知らないが、店員が客の失敗話を進んで聞く「うとするなんて妙だと思つた。

バーのような店であればそのようなこともあるだらう。また、常連となり、店員と仲睦まじくなつた客であれば、愚痴の一つや二つを聞くことはあるだらう。

しかし、船山は今日初めてこの店に立ち寄つた。店員とは一、二の言葉しか交わしていない。

それだけの関係なのに、どうしてそんなことをあけすけに語る必要があるのだろうか。

自分の気持ちに土足で踏み入れられようとしているよつに感じた船山は、不信感を抱かずにはいられなかつた。

周囲には自分よりも若い人間ばかり。その中で、自分の青臭い失恋話を暴露しなければならないというのか。

もしかしたら、この場にいる全員で自分を笑い上げるつもりではないのか。今までの過ぎたサービスも、話を引き出すための策略だつたら。

「……」「心配の多い」とかと思ひますが、そのような」とこにはなりませんので安心してくださいな」

疑心暗鬼に陥り、警戒心を強めた時、女性が言つた。

まるで、船山の心理を読み取つているかのよつた、見事なまでの

タイミングだった。

「来て間もない貴方にとつては不思議かも知れませんが、ここはそういう店ですから。私たち店員も、お客様からの話は他言無用を徹底しておりますし、話の内容にかかわらず笑つたりなどいう無礼はしないとお約束いたします」

女性はカウンターに体重を預けるように、体を乗り出す。女性の一連の動作が妙に艶めかしくて、船山は釘付けになった。

軽装のせいで、服装の上から体のラインが浮き出している。服の裾から覗く素肌の白さが異性を見た時の高揚感を誘う。頭髪の艶のある赤が嫌でも目につく。瞳の赤みが自分を見つめてくる。

「さあ、教えて……。貴方を支配している、貴方のお話を……」

女性の寄り添つよつた言ひ方とともに、船山の頬に手を触れてきた。

柔らかく、温かなその感触に、船山は意識がぼんやりとしてくる。眠くなつたわけではないのに、目の前の女性にしか目が行かなくなる。他のところは薄ぼんやりと霞み、見つめてくる女性の目や囁きかけてくる声にしか気が回らなくなる。

「……」

何も考へられない。
何も思ひつかない。
何も疑えない。

船山は我を忘れたよつて、これまで自分に何があつたのかを話した。

出来事のままに口に出していく。装飾も誇張もせず、しかし自分の感情を忘れずに付け加えて説明していく。異性にいいように利用された失敗の色事だというのに、聞いている人間は全員自分よりも年下だというのに、船山は恥など全く感じていなかった。話している自分が自分でなくなつたかのよう、「話す上で障害になる感情が全く浮かんでこなかつた。

出来事の全容を話しあると、船山ははつとなつた。何をべらべらと喋っていたのだろう。せつかくの場なのに、つまらない話を我を忘れたように白状していた。

一度自覚すると、自然と恥ずかしくなつてきた。顔を真つ赤に染め上げ、言い様のない後悔の念に駆られる。

この場に居たたまれなくなつた船山は、手元の鞄を慌てて取り上げ、席を立つ。

「あ、あのーすみませんでしたー自分はこれで……」

「あら、お代も払つていただけなのですか?」

「あつ……」

船山はまだ会計を済ませていないうことに気づいた。飲食を提供してもらつた身だというのに、そそつかしいにも程がある。

船山はポケットから財布を取り出し、代金を払おうと金額を尋ねる。

「そうですねえ……ところでお客様、小銭は今お持ちですか?」

「え……い、小銭ですか?」

女性は妙なことを訊いてきた。

相手の懐具合から代金を考慮する商談は間々あることだ。しかし、その場合は「今いくらお持ちか?」と訊くことが多いはずだ。しかし、この女性は相手の所持金全額ではなく、小銭に限定して尋ねてきている。船山にはその意図が分からなかつた。

「はい、鳴らすとちやりんちやりんと音が出る、あの小銭です」

「小銭にその印象しか持っていない人は店長ぐらいですよ」

脇にいたメイド姿の少女が呆れながらツツコミを入れた。

船山は質問の意図が思いつかず、諦めて財布を開く。小銭が入っているところを確認する。

この財布で小銭入れにしている場所は一つしかないので、全ての小銭が無造作に入っている。釣り銭が嵩んだ時には財布が膨らんでしおうがない代物だ。使える時に使っておかないと、沢山の釣り銭が返ってきた日には地獄を見る。

今持っている小銭は、三百三十六円だつた。小銭の量はそつまくはないが、あまりいい気にはなれない。語呂合わせで三三六とは自分らしい。

「ふむふむ。なるほど」

カウンターの向こうにいたはずの女性がいつの間にか隣に来て財布を覗き込んでいた。

「なつ!?」

突然の行動に船山は驚いて一步下がった。

財布は人の金銭事情を如実に反映している。お世辞にも潤つてゐるとはいえない船山にとって、女性の行動は失礼だと思った。

「それじゃあ、」

女性はおもむろに片手を伸ばすと、下向きた掌をくるりと反転させ、上向こにさせた。

その指には、今さつきには持つていなかつたはずの銀色の物体が挟まれている。

「お代はこちらをいただきますね」

女性が持つているのは、百円硬貨が三枚。

船山は思わず手元にある財布をもう一度見た。

……なくなつていて。

ついさつきまで入つていたはずの、三百三十六円のうちの三百円が、綺麗になくなつていて。

それは財布から抜き取つた物なのだろうが、いつそれが行われたのかは分からぬ。女性は財布に触れるどころか、手を伸ばしてすらいなかつた。

ただ、女性が手品か何かを使って、船山の財布から百円硬貨三枚を抜き取つたことになる。そうでしか説明できない。

船山は絶句した。

「それと、これは当店からのサービスです」

女性が船山のネクタイを掴む。突然のことに対する反応できなかつた船山は反射的に硬直してしまつた。抵抗する前に、女性はネクタイを自分のほうに力任せに引っ張る。

「つー?」

何が起きたのか一瞬理解できなかつた。
突飛すぎて思考が追いつかなかつた。
起きたことが事実だと思えなかつたが、感触が事実を肯定している。

女性は船山と唇を重ねていた。

船山の気持ちを一切無視して押しつけているのに、口に触れる感触は柔らかくて心地がいい。その感触に、船山は我を忘れて硬直する。

口元に伝わる温かな感触。

時折わずかに擦れることで魅入られる生々しさ。

どれだけの時間が経つた忘れてしまえた。

ふいに女性がするりと離れた。女性から離れるまで、船山はされるがままだつた。

「では、「きざんよう。帰り道はお気を付けくださいね」

間近につつこつと笑顔を見せつけられ、船山はいつも立つてもいられなくなつた。鞄を握り直し、逃げるように店を出た。

「わからぬ。何が起こつた。どうしてあんなことになつた。全力で走りながら、店の中で起きたことを反省する。

視界の端を過ぎ去つていく人に奇妙な目で見られよつとも、走る

のをやめられなかつた。

ただ、スーツに革靴ではさすがに走りににくい。加えて、しばらく運動などしていなかつたから体力の消耗が激しい。

船山は限界を感じたあたりで走るのをやめ、近くのガードレールに手をついた。チョーキング現象によつて白い粉が付いてしまうが、構つていられなかつた。

肩で息をしながら、首を絞めるネクタイを少し緩める。手を離す時、何かに当たつた。見下ろすと、ネクタイに見覚えのないネクタイピンが着けられている。一応自分で持つてゐる物はあるが、今自分が付けているようなデザインではなかつたはずだ。自分が持つっていたのは装飾のない真一文字のシンプルな物。しかし、今付けてゐるのは、ピンの端に宝石のよつた淡い橙色の珠が埋め込まれてゐる。

船山は特に何も考えず、今走つてきた道を振り返つた。

景色の向こにあつたはずの店。離れてしまつたが、目を凝らせば見えると思われる店。

しかし、いくら目を凝らしても、いくら見直しても、目当ての店の外観が見あたらなかつた。

だいたいの場所を思い出して見直しても、そこには出入口のない古びた壁しかない。

「おかしいな……」

存在したはずのものが違和感があるが、それがない風景は自然そのものだ。

糕然としないが、店で起きた出来事を忘れたくて、船山は帰り道を歩き出した。

店に入る前に抱いていた悲愴の感情は、本人が気づかないほど消え失せていた。

「ん~! これにて一件落着つと~!」

女性の背伸びとともに漏れた一言によつて、その場の緊張感が一気に霧散した。

来客が帰つたことで、仕事場には外向きのために繕つていた仮面が剥がれる。それぞれのメンバーは深呼吸をしたり肩をほぐすようにぐるぐる回したりして緊張を取る。

「あのお嬢さん、店長のキスでだいぶ放心してましたね」

男性が率直な印象を口にした。

「そりゃあ、今日あつたばかりの赤の他人にいきなりされたらショックを受けるだらうな。一息つくつもりで入つてきたのに風俗店紛いのことをされたんだから」

女の子が外見とそぐわない、男勝りの冷静な物言いで返す。

「やつぱりびっくりするんだって。私たちはもう見慣れちゃつていいけど」

慣れてはいけないのだが、さすがに毎度毎度同じことをされていては日常になつてしまつのも仕方ないと、すすきは思った。

少女の名前は深町すすき。
ふかまち

すすきといつのは植物の名前だが、漢字で書くと『薄』になつて

なんか存在感とか幸とかが薄くなりそうだから平仮名で書く。ちなみにアクセントは最初の“す”だ。『鈴木』ではなくて『吹雪』のよつな発音を取る。例えが物騒なのは勘弁してほしい。

年齢は十三歳。近くの和良蕊市立中学校に通つてゐる中学一年生だ。

学校の成績はお世辞にも良いとは言えない。得意な教科はなくてだいたいの教科が苦手。勉強下手つて言葉がよく当てはまる、特に取り柄のない女の子だつた。

今は和良蕊駅の近くにあるカフェにいる。店の名前は『チャーム』。短いが、店名を看板にしていないから大変覚えられにくい。外觀や内装を見ると喫茶店のようにも見えるが、商品の一つにアルコール類を扱つてゐるのでカフェに分類されている。

すすきはこの店のウェイトレスとしてアルバイトとして働かせてもらつてゐる。メイド姿に身を包んで働くのは最初抵抗があつたが、着てみると着心地はいいし動きやすいし、何より可愛いので今では気に入つてゐる。

「まあ、心の準備とかその前の雰囲気とか、何もなしにいきなりですからね……」

男性がすすきの意見に同意するよつに頷いた。同じ男性として、先程の客に同情したのだろう。

「おや？信矢は前触れがあれば初対面でもオッケーなのか。初耳だな」

それを聞いた女の子が揚げ足を取る。

「誰もそんなこと言つてませんつて。それに、その前触れすらも無理だつて荊歩さんも知つてゐるでしょ?」

「まったく、軟弱なのは治らんな」

男性が棘のない言葉で否定し、少女は期待外れとばかりに肩をすくめた。

男性の名前は為永信矢。

年齢は二十一歳。大学や専門学校には通つていないが、大学の通信教育で単位を取つてている。学生といって間違ひない。

背が高く、適度に筋肉の締まつた体をしている。すすきは直接見たことはないが、袖口から覗く腕の締まり方からそつと予想している。予想でしかないから外れている可能性もあるが。

信矢もこの店でアルバイトをしている。担当はカウンターでのバーテンダーだ。先程の客に出した例があるが、信矢は飲み物関係ならほとんど何でも作れる凄腕だ。すすきが知る範囲で、今までに注文を断つたことがない。

もともとそういうのが好きだったようで、この店に来る前にアルバイトをしていたらしい居酒屋のメニューを覚えきったのだとか。

他にも家庭料理も上手で、飲食店で出されるのと負けず劣らすと思えるぐらい美味しい。毎日のご飯を作ってくれるのも信矢のおかげだ。

言葉遣いは丁寧だし、性格も温厚で、朗らかな笑顔も見せてくれ

る。

完璧に見える彼だが、唯一にして最大の問題がある。

「はい、信矢さん」

すすきは客が飲み終えたコーヒーカップを片づけるため、信矢に手渡そうとそれを差し伸べた。すすきはテーブルなどのホールの片づけを、コーヒーカップなどの洗い物はカウンター担当の信矢の役目と割り振っている。

何気ないやりとりのはずだが、差し出された信矢は表情を歪め、体を仰け反らせている。

「え、ええ……」

返事はするものの、コーヒーカップを受け取ろうとはしない。その様子を見て、信矢以外の一同は「やれやれ」と溜め息をついた。

信矢は女性に対して極度な拒否反応を持つている。いわゆる『女性恐怖症』^{エミノフオビア}という精神疾患だ。

信矢自身もどうにか治したいと思い、そのためにここにいるのだ。この店の店員は信矢以外の全員が女性なので一見地獄のようだが、店長曰く荒療治だがそれしかないとのことだ。この手の疾患を治療するには“慣れる”ことが大事らしく、信矢もこの治療法を受け入れている。

本人にとつてはかなり酷な状況だが、一応治療の成果は出ている。本人も治そうと努力しているようだ。現在は一定の距離を取った状態で会話することは可能になるぐらいにまで治療でききたが、接触や接近状態になると急に恐怖に陥るらしい。まだまだ時間がかかる。

るところなのだ。

信矢と会話していた少女の名前は銀鏡荊歩。

難しくて男みたいな名前だが、れつきとした女だ。ただし見た目
に限る。

外見は十歳の女の子なのだが、中身は七十歳を超えているお婆ちゃんだ。戦前に生まれた人が何故そのようなことになつているのか
といふと、かなり込み入った複雑な説明を経てゐるところすきは聞か
されている。

とりあえずすきが知つてゐる事情は、十歳の体で七十年以上生き
てはいるのは店長とこの店チャームのおかげだということ。この
店の魔法で不老の生活を送れでいるというわけだ。

……今気になつた単語が出てきたと思つたが、もしかりん言い間違い
ではない。

荊歩の髪の色は真っ白に染まつてゐる。いや、変わつてゐる、と
言つたほうが正しいのかもしれない。

詳しいことは分からぬが、不老の魔法で外見の老化はほとんど
防げでいるが、唯一頭髪だけが老化を防げなかつたと言つてゐた。

荊歩はアルバイトではない。先ほどの説明と重複するが、“この
店にいること”が賃金になつていて、金銭は貰つていいらしい。
不老の生活を望むことになつた経緯は、何となく訊かないほうがい
いような気がして訊いていない。尋ねれば答えてくれそうだが、荊
歩も店長も話そつとしないし、生活するのに困つたことはないので、
別にじだわらなくてもいいかと思つてゐる。

荊歩は生きた毎日を重ねて「いるせいか、口調がどうも女っぽくない。凛としている、といえば聞こえはいいが、端々に現れる口癖などは男性のものに思えて仕方がない。そして喋っている見た目がすきよりも年下の少女なので、なんだか偉そうに見えたり、渋くて逆に愛嬌があつたりする。

口調の割に世話好きで、見た目の親近感や知識の豊富さが相まって、すくすくにとつては話しやすい相手でもある。

チャームでの役割はお菓子担当。荊歩の場合は公私を問わずお菓子作りが好きだと言つてはいる。趣味が功を奏したというわけだ。客に出したマドレーヌももちろん彼女お手製で、材料の選び方や作り方や泡立ての力加減や火加減の計算など、もはや熟年の成せる技だ。こればかりは勝てる気がしない。料理上手の信矢も適わないのだそうだ。

いろいろな菓子に挑戦しているらしく、ケーキなどの洋菓子や饅頭などの和菓子も作れる。レパートリーも豊富だ。

「わひと、密足も一段落したことだし、続きでもしようつかな」

店長の女性は機敏な動きで裏に消え去るひつとした。

「待つて！ あれだけやつたのにまだ続けるつもりなんですか！？」

すすきは思わず制止する。再びテレビの前に向かってゲームを開しようとしているのだろう。

しかし女性は止まるつもりははなはな端から無いようだ。

「違うわよ。今度はトロッコでもやろうと思つて

「III-1ゲームは別でもソフトは同じです！」

「田舎せ一分五十秒！…」

「無茶言つな……つていうか仕事しろー…！」

すすきは声を荒げて裏へ消えようとする店長の女性を食い止めるべく、追いかけた。

他の全員が店長と呼んでいるこの女性こそ、チャームのオーナーだ。

名前はトフルカ。名前からしてもちろん外国出身だ。ファミリー
ネームは聞いたことがなく、あるかどうかも分からぬ。

日本人にはない肌の白さや、赤い長髪と眼という特徴的な容姿を持つている。日本人と同じような控えめな身長をしているが、プロポーションは控えずバランス良く出ている。見た目だけで見ればすすきが羨ましくなるほどの美人だ。

綺麗な人だが正体はかなりのゲーマーで、新古の様々な作品に手を伸ばしてはやり込んでいる。この間なんて、とあるRPGゲームでマーカスを自力でレベル九十九まで上げたぐらいだ。しかも、自動レベル上げ（エンカウンタ可能な場所でコントローラーのスティックをテープなどで固定、および連射機パッドを使用して決定ボタンを連打させ、自動操縦で経験値を稼がせる手法）やチート（ソフトウェアやROMカセットの内部データを改造ツールなどを使用して改変し、制作者の意図しない動作を起こさせる行為）などを使わず、自力操作で上げ遂げたらしい。知らない人にはピンと来ないか

もしれないが、とりあえずそのRPGゲームの進行上必須ではないレベル上げで、やればそれなりの報酬はある要素で、しかしながら恐ろしい時間がかかる作業だということだけは断言しておぐ。

こんな中身だが、トワルカは魔法を駆使できる。俗に言つ『魔法使い』だ。

信じられないかもしないが、すすきも含めてチャームの従業員はそれを田の当たりにしてるので信じるしかなくなつてゐる。どんな魔法が使えるかと云つと、トワルカ曰く「さあ? とりあえず好きなやつ全部かな」とのこと。よく分からぬが、好み種類の魔法はあらかた使えるらしい。

荊歩の不老もトワルカの魔法によるものらしい。チャームの店全体に魔法をかけ、荊歩に不老の体を与えていたというのが受けた説明だ。原理はどうなつてゐるのかは知る由もないが、歳を取らないなんて非常識な現象を、彼女は日常的に起こしているということとなる。

ちなみに、不老の魔法はトワルカ自身は使っていないそうだ。魔法使いはもともと肉体的な老化がとても遅く、寿命近くまで変化が現れないといつ。

他にも、魔法を商売の所々で使つてゐる。今回の客にも、マドレーヌを受け取つた時に感情を暴発させる魔法をかけていたし、直接ほおに触れた時に面白の魔法をかけて失恋の暴露話を晒し出させたのだから恐ろしいにも程がある。

また、客の男性にはさりげなくネクタイピンをプレゼントしておいたのだが、あれにも魔法がかかっている。どんな魔法なのかすすきが尋ねた。

「見てなさい。あの男の人、この間ミニロートを買つたのね。それが

見事一等に当選して賞金約一千万円ゲットするわよ

「……ええっ！？」

「うーん、我ながら美しい人助けよねーこんなのに他に類を見ないわー！」

「ま、待ってください！ロトシックスの当選確率って、ものすごく低くなかったですか？」

「ハロー！ロトだと、三十一種類の数字から五個を取る組合せだから、コンビネーション三十一の五で十六万九千九百十一通りかしら？ロトシックスの確率はもう少し低いけど」

「なんで当たるなんて分かるんですか！そんな大金、次の抽籤で都合良く当たるなんてありえないでしょー？」

「ふふつ、私を誰だと思ってるの？ロトシックスの当選番号は電動攪拌式遠心力型抽籤機、通称『夢ロトくん』を使ったアナログな方法で無作為に決定してるのよ。そんな乱数なんて私の敵じゃないわよ」

ちなみにネクタイピンにはその当選一回で魔法が切れる仕様にしてあるらしい。非常識なことをしでかしている割には抜け目がない。

「……まさかとは思いますが、生活費とか私たちの給料まで、その宝くじから出てるなんて言わないですよね？」

「あら、察しがいいじゃなー。さすがに毎回は当てないけど、必要になつたら適宜当てるわよ。盗難でも犯罪でもないのに、働かず

に堂々と大金を手に入れる快感はいつでも気持ちいいわ~

確かに、さすがの司法も魔法という非現実的な手段を根拠として取り締まる体勢など想定していないだろう。

“当たった”のではなく“当てている”トワルカの存在は、頭の先からつま先まで無茶苦茶だと思った。

人生を左右する大金の行く先を鼻歌交じりに変えてしまつトワルカを前に、すすきは捨て鉢の思考に走りたくなつた。世の中お金に苦しんで一生懸命働いている人達がどれだけいると思っているのだろ~。

それにしても一千円というのも多額だが半端な数字だ。あの男性の借金総額は一千円以上だったはずだ。あとわずかに足りない計算になる。

そのことを訊くと、トワルカは変わらない笑顔で応えた。

「全額返済まで手を出すと、人間は反省する度合いが減るからね。一千万は無理でも数十万ならなんとか……って思えたら重畠なの。それぐらいの量なら実現可能な期間で返済できるだろうし、金融機関から急かされても家族や会社の人間から借りればまだ間に合つじ

説明しながら、トワルカは腕を組んで自慢げに続ける。

「とりあえず返済の手段はたくさんあるだろうから、多少借金を残してそれをどう返済しきるかがあの男の人の見せ所つてわけよ。借金はなくなり、同時に痛い目にも遭えるから反省もできる。こんな素晴らしい復活劇を用意してあげられるなんて、私凄くないかしら

!~」

ウザい自画自賛をひけらかしているが、言っていることは間違い

ではない。普段のやることや思つことは人外過ぎるが、いついつ時だけ良識を發揮するのだからずるいと思つ。

「さてと、そろそろ閉店の準備をしようかしら。すすきのやん、表の出入り口の戸締まりお願いね」

トワルカはみんなに閉店の指示を出した。

「もう閉めちゃうんですか？いつもならもう少し開けておくの」

「今日はもういいかなーって。さつきの人で充分搾取できだし」

そう言つて、にこりと笑顔を作る。それだけを見れば可愛い女性という印象を持てるのだろうが、私をはじめとして他の一人も呆れている。

トワルカの魔法は確かに非常識なものばかりだが、使い続けるとやはり疲れるらしい。魔法使いにとって魔力というのは人間のスタミナと同じようなものらしく、大がかりな魔法を使うと相当くたびれるらしい。

そこで、トワルカは他人の情動を魔力に変換して吸い取るという、危険な臭いのする方法を取つてゐる。先刻の男性客も、泣き出してしまってほどの深い『悲しみ』をトワルナに吸収されてゐる。今頃は沈むような気分が嘘のように晴れていことだろう。

ただ、吸収する方法が、その……キスつていつのは、やっぱり見ていて恥ずかしい。

「これが一番吸い取りやすいのよ。遠心力なんて信じやないわ」

「誰が掃除機の話をしてますか！」

「よかつたらすすきちゃんも体験してみる？悩みなんかきつとびつかのお空に飛んでつちやうわよ」

「ぜつたに遠慮します！」

危険な臭いが自分にたかってきたような気がして、片付けの担当場所へ逃げた。

ちなみに、私はトワルカのことを『トワさん』と呼んでいる。愛称のほうがいいと本人から希望があつたし、慣れるところのほうが何となく呼びやすかつた。

すすきの接吻回避をきっかけに話は一度切られ、店長の言つ通りに店の片づけを始めた。

私の担当はホールの片付けだ。出入口に『CLOSE』の札をかけて、ブラインドを下ろす。

それが終えたら、カウンターとテーブルとイスを拭いていく。今日の来客はあの男性一人だけだったみたいなので、大して汚れてはいない。普段から綺麗にするように心懸けてるので、最低限の清拭で済んだ。客足が少ないかもしけないが、この店の事情によって普段からこれぐらいの来客数なので気にしない。

テーブル周りが終わったら、床の掃除をする。客が少なくてもすすき達が店内を動いているために埃が溜まってしまうので、毎日欠かさずに行っている。外からの来客があつた日には靴底に付いていた砂埃が入ってくるので、きちんと取つておかないと床がざらついてしまう。お客様に気持ちよく飲食できるように、自分ができることはきちんとやっておこうとすすきは思つている。

信矢はカウンター周りの片付けを担当している。キッチンの清掃やジュース、アルコールなどのボトル棚の整頓、食器の清拭、在庫数や消費期限の近いものがないか確認、ビールサーバーや今日使用

したエスプレッソマシンの分解洗浄など、とにかくやることが多い。食材の瓶には一つ一つに真空と紫外線遮断の魔法が処置されているので品質の劣化が訪れにくくなつてはいるが、念のための確認作業だ。

すすきのようにある程度大雑把にやつてもできる清掃と違い、キッキン周りには小物が多いので纖細に取り扱わなければならぬ。片付けの場所の広さがすすきよりも狭いとはいへ、気を緩めてはいけない担当場所だ。

細かい作業の多いキッキン周りの掃除を、信矢は要領よく進めていく。てきぱきとこなし、磨いた食器はいつもぴかぴかになつて、すすきはいつも圧巻されている。もともと物を大切に扱う信矢の性格が仕事に現れているのだと思ひ。

荊歩はレジの金銭管理を任せられている。レジの記録から決算を算出し、レジの中にあるお金と差がないか確認する作業だ。普段から客足の遠いチャームでは売上も微々たるものなので、精算が一番簡単な仕事かもしれない。

すぐに済んでしまうので、荊歩は終わるとすすきの片付けを手伝つてくれる。すすきの仕事も難しいものではないが、範囲が広いので手伝つてくれるとかなり助かっている。本当は信矢の掃除を手伝えるのが一番効率がいいのだが、女性恐怖症のためにいかんせん簡単にはいかないらしい。

店のオーナーであるトワルカは何をやつているかといふと、アクセサリ棚の整頓をしている。一応この店の売り上げの一端を担つてるので無視できない仕事だが、普段から全員が気にかけている部分であるし、来客が多い店と違つて商品が乱雑になることもない。別にやらなくてもいいところではないかと思っている。

客足の少ないこの店では実際に売り上げる商品の数は片手の指の数を下回る。何を販売したか振り返るだけで把握できそうなのに、

改めて商品棚を眺めて確認するものでもない。要は、トワルカは仕事をサボタージュしたいだけなのだろう。仕事をしているフリをすることは正直タチが悪い。

一連の片付けが終わると、晴れて今日の業務は終わりということになる。

すすきは両手を上げて体を伸ばす。この仕事が終わった直後の時間が割と気に入っている。全員で片付けを終わらせて接客用の態度を解くと、「今日も頑張った」という気持ちになる。

決して忙しい仕事ではないが、十三歳で仕事をしている身としては初めての職場があるので、毎日の取り組みが充実したものであるように留意している。

今日の場合も、お客様が悪い気分にならなかつたかとか、失礼なことを言わなかつたかとか、ウェイトレスとしてふさわしい姿勢をきちんと取れていたかとか、自分なりに反省をして、あとでトワルカ達にも訊いている。

上手くいったことと良くないと思ったことを考えて、明日の仕事ではいいことはそのまま伸ばし、悪いところは直るように気をつけたい。単純な考え方だが、今の自分にできる努力の方法だと思つていい。

「さて、それじゃ上がりましょうか

トワルカがポンッと両手を合わせた。その鶴の一声にすすき、信矢、荊歩は、全員揃つて一階に繋がる階段へと足を運んだ。

更衣室が一階にあるからというのが理由だが、大抵の場合はそのまま家族団欒へと入る。生活環境が二階にあるのでその流れもいつも通りだ。

階段を上る途中で、すすきは足を止めて一階と二階の間を見る。

そこには階を隔てる床と天井が見えるだけである。

「……いつも思つたんですけど、どうなってんでしょう、この家」

すすきは思つた通りのことを口に出す。

「ああ……考へても分からんじゃないかと」

信矢が同意の返事を言ひつ。

「こゝで一応確認しておく。

重複するが、この店は見た目が一階建てである。
しかし、今は一階建てに繋がる階段を上つてこる。生活の場も一
階にある。

つまり、どうこうことかといつと……。

外観は一階建てなのに、中に入ると一階が存在するのである。

実際にトワルカにこの疑問をぶつけてみたところ、訳の分からな
い説明が返つてきただのを憶えている。内容が難しそぎてちゃんとは
憶えていないが、スイングバイやパーセク、クエーサーなどの横文
字の単語がちらほら使われていたような気がする。

「まだに疑問は晴れないが、生活するのに支障が出たことはない
ので気にしないことにした。

「ほり、何止まつているんだ。後ろがつつかえてしまつだろ」

「あ、ごめんね荊歩」

後続の人から苦情が来たので、すすきは前へ向き直して足を進め

た。

階段を進みながら、後ろから再び声がかけられた。

「ヒーリー、今田のお風呂はまだするんだ？」

「うーん、荊歩が良かつたら、今田も一緒に入っててくれる？」

「あたしで良ければ構わないぞ」

「ほんと?」

「ああ。じゃあ準備しておくから、先にお風呂場に行つてくれ」

「うん、わかった。ありがと!」

荊歩と約束を取り付け、すすきは心を弾ませた。

お風呂といつのは銭湯のような公衆浴場ではない。この家の中にある家庭用の浴室のことだ。他の同年代はどつなのか知らないが、すすきは一人ではないより誰かと一緒に入りたいと思つている。その場合、大抵は荊歩に付き合つてもらつてているのだ。

一般家庭の風呂にアルバイトであるすすきがビジビして入つているのかどうと、答えは至極簡単だ。

荊歩だけでなく、すすきと信矢もこの店に住んでいるのだ。全員がトワルカに許可を貰い、住み込みのアルバイトとして居場所をくれている。

どんな経緯があつてそつたのかと云ふと、それぞれ異なる理由があつてここにいる。

信矢は女性恐怖症を克服するため。

荆歩は不老の体を手に入れるため。
そして、すすきは……。

「あー、すすきちゃんは荆歩と入るの？それじゃあ私も一緒に入る
つかしいー。」

「ええっ？トワさんも入るんですか！？」

突然のトワルカの参加宣言、すすきは及び腰になつた。

「駄目なのか？」

「だ、だめじゃないですけど……」

荆歩が不思議がつて訊いてきたが、本音のことを訊いたのは恥ずか
しかつた。

（だつて、トワさん、すぐ胸とか触つてくるんだもん……）

だが今はすぐ傍に信矢といつ男性がいるため、口に出すことはで
きなかつた。自分の体が原因だなんて口が裂けても言べるものか。
信矢と荆歩が心配そうに窺うなか、トワルカは氣に留めていない
ようだつた。

「別にいいじゃないの。久し振りに定期検診したい気もあるし」

「……は？定期検診って何ですか？」

言葉の意味が分からなくて、すすきは聞き返してしまつた。
その質問に、トワルカはほんわかと答える。

「もちろんカラダのよ。すすきちゃん、最近胸が大きくなつてきたから触り甲斐がありそうだし~」

「やつにえは段々と膨らんできていの。女として羨ましに限りだ」

「荆歩も何変な」と言つてんのーーそ、そんなことないからーー」

「別に隠さなくてもいいじゃないか。この間は初めてブラを買ったんだの?」

「なんだそんなん」と僕が尋ねた。「…?」

「買ったの！？何色！？」

「トコちゃん、田の色変えて食いつかないでください。あと田なんか
聞いてどうするつもりなんなんですか！？」

年上の女性一人を相手にするとすすきの個人情報はまだ漏れになりがちだ。女しかいない場ならいいが、少しは周りを見て考えてほしいところなのに。

白一点の信矢は、「ははは……」と苦笑しながら気まずそうにしている。周りの人間のせいで自分のことを暴かれ、すすきは顔は真っ赤になつた。

「ああああ、ああああああんは純情なのねえ！」

「まったくだな。初々しいと見ていて微笑ましいよ」

「誰のせいですか誰の！！」

一人にからかわれ、すすきはそっぽを向いた。
何かと騒がしくて逞しい個性のある人達に囲まれているが、この
家が今のすすきの住む場所だ。

以前の自分にはとても想像できない、幸せに満ちた場所。
できるだけここで長く暮らしたい。そう願つてやまない、愛おし
い人達と場所。

少しでも手にしていられるよう、すすきは階段を上る足を早める。

過去から少しでも早く遠ざかれるよう。ひい。

昔を少しでも遠くに追いやれるよう。

一步一歩が自分の未来を引き寄せられるよう。

すすきは歩を進めていった。

ep1 - 2 (後書き)

本作をお読みいただきありがとうございます。
最後は不思議な終わり方をしましたが、次話からはいきなり過去の
話に入ります。

すすきがどんな経緯で今に至るのか、綴りたいと思います。

甘森穂苗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2202ba/>

笑顔にまつわるマジックショップ

2012年1月5日17時54分発行